

き 紀 の 之 み 水 な 門 と



寄贈資料紹介 さかうえ も いちろう 阪上茂一郎関連史料(池田村南中/現紀の川市出身)

阪上茂一郎氏は、池田村(旧打田町、現紀の川市)出身です。紀ノ川の中流に位置する旧那賀郡(現在の紀の川市など)は、和歌山県下におけるアメリカ移民の発祥の地として最古の地であろうとされています。なかでも第一位の移民村が池田村でした。

茂一郎は、1899年(明治32)に17才で渡米しています。サンフランシスコに上陸した後、サクラメントで農業に従事しました。その後、アラスカで漁業に従事したあと、カリフォルニア州南端のインペリアルバレー(帝国平原)において、牧場や農場を経営しています。

阪上家は、共修学舎門人で池田村の大庄屋である山田万三郎家と長く縁戚関係にあったことから、寄贈資料は山田家末裔の方によって保存されていました。2020年8月、当該資料は、山田家の方から那賀移民史懇話会に今後の保存について相談が寄せられました。さらに那賀移民史懇話会から紀州経済史文化史研究所に連絡をいただき、協議のうえ、9月に研究所に寄贈いただきました。

寄贈いただいた遺物は、和歌山県における北米移民の状況を示す資料の一つとして、2020年企画展「亜米利加へ、加奈陀へ—遺物と記憶から振り返る移民と和歌山」(10月16日~11月5日)にて披露いたしました。このような資料は、百数十年の時を超えて、明治の頃より北米に移民した人びとの当時の様子を、現在の私たちに語ってくれます。(東悦子/移民研究)

阪上茂一郎氏資料	資料名	発行年
1 パノラマ写真	加州帝国平原 阪上茂一郎氏経営瓜園	1919
2 書籍	『和歌山県人発展史』(一部欠損あり)	1915
3 書籍	『日米住所録 1923 No. 19』	1923
4 書籍	『日米住所録 1931 No. 27』	1923
5 書籍	『楠公六百年祭記念神戸観光博覧会誌』	1935
6 写真帖	南加在留代表的日本人 平和祈念写真帖	1922
7 写真(米国製額入り)	阪上夫妻	1919
8 写真(米国製額入り)	阪上一家	1919
9 トランク	手提げトランク(深緑)	不明

※「共修学舎」は、慶應義塾で学んだ本多和一郎が1880年(明治13)に開いた私塾です。

※寄贈写真に「坂上」という表記が使用されていますが、戸籍表記に従い「阪上」資料としました。

※「那賀移民史懇話会」は、「那賀地方の移民資料や情報の収集、意見交換、交流をおこなう」ことを目的として、2014年(平成26)3月に発足した団体です。

紀伊半島のロギオスたち— λόγιος — 紀州研に所属する研究者(ロギオス λόγιος)たちの 研究を紹介します

九度山町における 歴史的環境について

九度山町は高野山に向かう町石道の起点にあたり、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に登録された慈尊院や丹生官省府神社があります。そこから歩いて10分ほどのところに町の中心があり、周辺の丘陵地には富有柿を中心とした柿畑が広がっています。九度山町では文化財を生かした取り組みが行われており、平成28～30年度に文化庁の文化遺産総合活用推進事業を受けて行った調査研究の内容について、ここで少しご紹介したいと思います。

町の中心である大字九度山の民家には、格子やむしこ窓、煙出しなどの伝統的な意匠が用いられるほか、特に真田の道沿いには商家が多く見られます(かつての商家も含む)。また、約半数が平屋またはつし二階であること



真田の道の町並みの様子

から高さが抑えられており、雨引山などの山並みへの眺望が維持されています。細街路は1767年に描かれた古地図と比べても大きな変化はなく現在に受け継がれ、起伏のある地形のため坂道が多く、石垣などの擁壁が多く用いられています。敷地境界においては幅の広い通りでは

コンクリート製の擁壁が多い一方で、細街路で構成される町の中心では、民家に加えて寺院も複数存在することから石垣や生垣、和風塀などが用いられ、歴史的環境を生かした町並みを形成しています。このほか、松の木や井戸も細街路に面しており、地域資源として存在しています。これらのことから、世界遺産の玄関口である町の中心においても歴史的環境が見られ、地域の人々により維持管理が行われていることが伺えます。

(宮川智子/建築計画・都市計画)

農業経済学は面白い。農業経済学は理系と認識されている農学のなかで、明確に文系である。とはいえ、そもそも、「農学は農業・林業・漁業などの第一次産業を対象とした総合的な学問であり、理系や文系という分け方がなじまない」とされている。一方で、「(理系的な)農学のなかに、明確に文系である農業経済学が存在するからこそ、農学が総合学として成立する」とも言われている。農業経済学の対象は、産業としての農業(もちろん、林業や漁業も)に関する諸問題だけでなく、食料、環境、流通、消費、生活、文化など多岐にわたる。だから「農業経済学は雑学重視」という人もいる。現在、広く食料や農業を学生に知ってもらうことを目的としてJAわかやま寄付講義「食と農のこれか



農作業を手伝う学生たち

らを考える」を開講しており、4学部から受講生が集まっている。受講生からは、「自分たちの各学部での学びが食料・農業・農村と少なからずつながっている」や「農業や農村に興味関心が持てた」との感想を聞く。衰退する第一次産業や農山村の存在意義やこれからのあり方について、学生が関心

を持ってくれることは喜ばしい。そして、興味関心を持ったなら、教室での学びにとどまらず、現場に出向いてほしい。現場に頻繁に通って、農業や農村社会に興味を示し続けることが大切ではないか。コロナが落ち着けば、「また、現場へ行こう!」と研究室で想う。

(岸上光克/農業経済学)

天文教育で世界をつなぐ

天文教育と言えば、星の難しい話をかみ砕いて話して回る仕事か、驚異の宇宙の世界を派手に紹介する仕事か、と思われているかもしれませんが、それなりに当たっています。しかしそれは表面的なことです。

世界の天文学の研究者で組織された、天文分野での一大国際組織として国際天文学連合 (IAU) があります。戦略計画2020-2030の内容を、ものすごくかみ砕いて言い直すと、経済状況の悪いところであれ、治安の悪いところであれ、病院であれ、そして、身体的に障害を持っている人が、世界中のいろいろな人々に会いに行く、そして、どのような文化的障壁があろうか、政治的困難があろうか、世界の人々の心をつなぐために天文を活用することに努力する、です。活用には、教育、アウトリーチ、観光、



日本やイランをはじめ、世界の学校の先生や生徒が2021年の夏至の時にオンライン交流会をした時のチラシ

の助言、提案、そして協力を楽しみにしています。

(富田晃彦/天文学)

技術開発、研究、そしてその基盤整備、そのためのインフラ整備、それらをもとにした新しい産業創出、そして経済発展などが考えられます。そんなことができるのか、霞を食っているお前らが、というヤジが聞こえてきそうですが、人間の社会の障壁を越えるのに、学問がどう貢献できるのかは、学問としての大きな目的のひとつです。

では和歌山では、となります。教育、アウトリーチ、研究、基盤整備など、いずれも人間の活動です。その活動の要素は、人間一人分の活動です。それがこの和歌山大学での活動です。和歌山から世界へ。そして、天文教育は世界の人々をつなぐ基盤に貢献できるのか。みなさんから

持続可能な観光

「日本版持続可能な観光ガイドライン」(Japan Sustainable Tourism Standard for Destinations, JSTS-D)が2020年6月に観光庁から発行された。 destinations (地域) がより持続可能な観光地域になるためのガイドラインとして、グローバルサステナブルツーリズム協議会 (GSTC) が制定する国際基準 (GSTC-D, 地域版) に準拠して策定された。サステナブルなマネジメント、経済/社会・文化/環境のサステナビリティという4分野、47の基準から成るこのガイドラインは、SDGsとの整合性も示され、総合政策ツールとしての性格が強く、地域の現状チェック、優先項目や課題の設定などに使うことができる。観光庁は2020年度5地域、2021年度15地域をモデル地域として選定し、それぞれJSTS-D基準に照らし合わせた現状分析や観光計画の策定などを推進している。地域は自身のモニタリングのみなら



持続可能な観光ガイドライン
<https://www.mlit.go.jp/kankocho/content/001350849.pdf>

ず、これを「共通言語」とした他地域との比較や情報共有も可能となる。

世界が脱炭素に向かう今、全排出量の5%~8%が起因するとされる観光は、今後サステナブルな方向に転換していかなければ生き残りは難しい。和歌山にはその可能性が多くある。旅行ガイドブック「Lonely Planetの読者が選ぶ地域2021」のサステナビリティ分野で一位となったことは熊野古道など自然との共生を教える深い精神の地を歩いた人々の評価が大きいと考えられる。今日、コロナ禍で「密を避け、近隣、個人・小グループ、自然の中でゆったりと時間を過ごす」ツーリズムの価値が再発見されてきている。このような「スローツーリズム」に

加え、脱炭素、脱プラスチック、食品ロスゼロなど「サステナブルな高価値」で企画するツーリズムは今後のブランドとして注目される。和歌山がその先進地域になることを期待している。

(加藤久美/観光学)



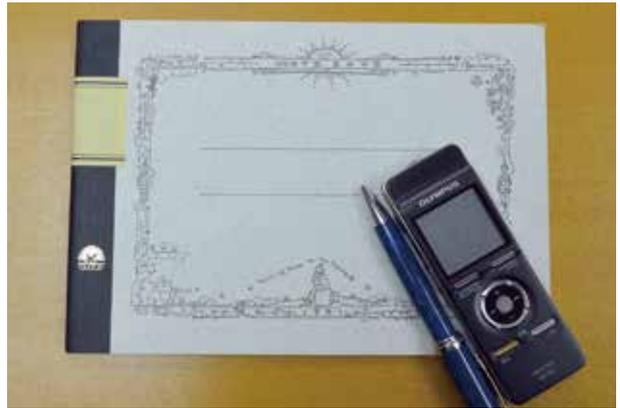
紀伊半島価値共創基幹プロジェクト紹介

オーラリティによる歴史・文化発掘と オーラルヒストリー・アーカイブの構築



このプロジェクトの目的は、オーラリティ(口述の語り)を用いて紀伊半島の歴史や文化を発掘することです。歴史的・社会的な出来事を体験した人々の証言を聴き取るオーラルヒストリーの手法は、歴史学のみならず、文化人類学、民俗学、社会学、政治学など様々な学問領域で採用されています。体験者の生きられた経験を重視するこの方法は、文献資料には必ずしも記録されておらず、出来事に関係する人々のあいだでのみ共有されてきた歴史や文化を発掘するのに適しています。

今年度は、①1969年を中心とする和歌山大学における学生運動の経験、②太平洋戦争前後の北米および中南米諸国への移民経験、③紀伊半島大水害をめぐる災害復興のプロセス、④和歌山県の女性起業家の経験に関するオーラルヒストリーを収集する予定です。そのうえで、これらのオーラルヒストリー



を紀州研がすでに収集している文献資料と比較・検討しながら、今後の展示・研究に活用していきます。

地域社会の歴史や文化を次世代へと継承するには、証言が消えてしまう前に記録して保存するだけでなく、誰もがそれを聴くことができるような仕組み(オーラルヒストリー・アーカイブ)が必要です。こうした仕組みづくりは、大学の重要な使命であると考えています。
(西倉実季/社会学)

和歌の浦の景観および 和歌祭の保存と継承プロジェクト



このプロジェクトの目的は、2010年(平成22)に名勝に指定された和歌の浦の景観および同地で開催されている和歌祭の保存と継承をすることです。

紀州経済史文化史研究所(以下、紀州研)では、和歌の浦での歴史学的・社会学的研究が盛んであり、1989年(平成元)の和歌の浦景観保全住民訴訟運動でもその研究が基盤となるなど、さまざまな分野での研究が蓄積され続けています。さらに和



2020年の基幹プロジェクトで新調した唐人装束(企画展「和歌祭―渡物と練物―」)

歌の浦の紀州東照宮の例祭である和歌祭でも当時から故・米田頼司氏(幹事(当時))を中心に研究が行なわれており、2010年の和歌祭唐船での御船歌の復興、そして2017年(平成29)には352年ぶりとなる唐人の復興を実現しています。

紀州研では、2010年以前から教育学部で実施している「ミュージアム・ボランティ



和歌祭の唐人(2019年)

ア」の学生を受け入れ、さらに2014年(平成26)からは学生ボランティアを全学部の学生を対象とした「紀州研ボランティア」を立ちあげています。このボランティアでは積極的に和歌祭参加者を募り、教養科目「民俗芸能論」(担当:吉村旭輝(運営委員/特任准教授))、「日本事情」(担当:長友文子(所員/国際連携部門教授))などの授業と合わせて現在では200名を超える学生が和歌祭に参加しています。

またこの活動には多くの留学生も参加しています。留学生にとっては地域の歴史をしっかりと学び、祭礼に参加することで地域の方々と表面的な交流の枠をこえたより深い地域交流による新たな視点を培う場となっています。2020年度の本事業では新たに2着の唐人装束を新調しました。今年度もひきつづき唐人装束を新調し、留学生の地域学習の促進につなげていきたいと考えています。

(吉村旭輝/日本芸能史・民俗芸能)

2021
年度

新体制でスタート



和歌浦図屏風



家乗(紀州藩家老三浦家文書)

いずれも本研究所所蔵

今年度に本研究所の所長を任命されました経済学部の長廣利崇と申します。若輩者ではありますが、副所長の西倉実季先生と東悦子先生、専任教員の吉村旭輝先生、教育研究アドバイザーの上村雅洋・藤本清二郎両名誉教授、さらには多くの所員と事務スタッフの皆様のご指導とご助言の下で業務を進めてきました。

この場をお借りして、本研究所の活動内容を紹介申し上げます。紀州経済史文化史研究所(通称:紀州研)は、紀州地域の経済や文化の歴史と自然の研究、これらの資料収集と展示を主な業務としております。紀州研は、本学の紀伊半島価値共創基幹 Kii-Plusの一員として、歴史や文化に関する地域の課題に取り組んでいます。とりわけ、近年は、和歌祭とオーラリティについてのプロジェクト事業に着手しました。本研究所は社会・地域に開かれた研究機関を目指しております。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

(長廣利崇／近現代日本経済史・経営史)

紀州経済史
文化史研究所
担当科目報告

教養科目「わかやま未来学」・「わかやまを学ぶ」

2021年度前期教養科目として紀州研では、「わかやま未来学」の一部および「わかやまを学ぶ」を担当しました。

「わかやま未来学」

「わかやま未来学」は、教養教育科目をとおしての学修の端緒を開く科目として位置づけられ、和歌山大学に入学した1年生全員(974名)が履修する必修科目にあたります(すべてオンデマンド形式授業)。その内容は地域学的なアプローチによって和歌山県内のいくつかの地域に光をあてています。この科目のうち紀州研では、吉村旭輝(紀州研運営委員／特任准教授)が5月6日に第3回「わかやまの歴史・民俗と未来—表象文化としての祭り／祭礼—」を担当し、わかやまの歴史および民俗について祭り／祭礼を中心とした講義を行ないました。



わかやまを学ぶ授業風景

「わかやまを学ぶ」

「わかやまを学ぶ」は「わかやま」が持っている固有の状況について歴史的・文化的・社会的視座で捉えながら、専門家の目を通して学ぶ講義です。紀州研の所員で構成された13名の教員それぞれが出会い、興味をひかれ、真剣に探究してきた「わかやま」研究の講義を各回で行ないました(対面形式(1回~2回、13回~15回)・オンデマンド形式(3回~12回))。今年度は抽選によって215名の学生(科目等履修生2名含む)が履修し、15回をとおして学習しました。

(吉村旭輝／日本芸能史・民俗芸能)

【 わかやまを学ぶ(全15回) 】

- | | | | |
|-----------|----------------------------|------------|----------------------|
| 第1回(4/16) | ガイダンス(吉村旭輝) | 第9回(6/11) | 和歌山の方言(澤村美幸) |
| 第2回(4/23) | 干潟の生き物と生態系サービス(古賀庸憲) | 第10回(6/18) | わかやまの風土産業(藤田和史) |
| 第3回(4/30) | 反逆者の国・わかやま(海津一朗) | 第11回(6/25) | 和歌山に歌い継がれた音楽(遠藤史) |
| 第4回(5/7) | 移民母県わかやま—グローバルに移動した人々(東悦子) | 第12回(7/2) | 和歌山の鉱山の歴史(長廣利崇) |
| 第5回(5/14) | 和歌山の鯨と観光(吉田道代) | 第13回(7/9) | 和歌山より、障壁を越える天文(富田晃彦) |
| 第6回(5/21) | わかやまの農業にふれる(荒木良一) | 第14回(7/16) | 和歌山の在日コリアン(西倉実季) |
| 第7回(5/28) | わかやまの食と農(岸上光克) | 第15回(7/30) | 全体の総括(吉村旭輝) |
| 第8回(6/4) | 紀伊半島の民家と石垣の地域性(平田隆行) | | |



2021年4月6日(火)から5月28日(金)まで、企画展「和歌祭—渡物と練物—」を開催いたしました。大阪府での緊急事態宣言発出をうけて本学において学生の登学が原則禁止となり、当研究所の展示室がある図書館も4月26日(月)から6月10日(木)まで臨時休館となったため、展示室開室は4月23日(金)までとしました。5月6日(木)以降はオンライン展示としてダイジェスト版を公開しています(和歌山大学公式YouTubeチャンネル)。

和歌祭が開催される紀州東照宮は、徳川家康の十男であり、紀州徳川家初代にあたる徳川頼宣が父・家康を東照大権現として祀るために創建されました。頼宣が紀州藩主になる前は、家康が亡くなった場所である駿府城主であったことから、家康が死去した直後に久能山東照社の



企画展の様子

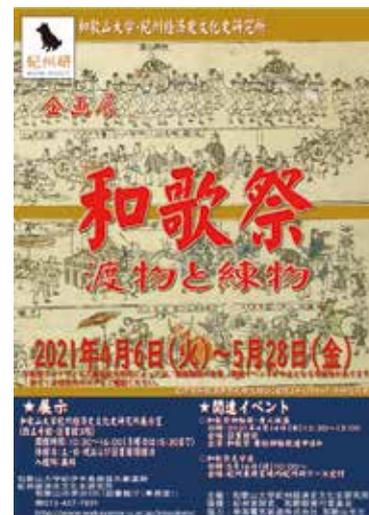


オープニングイベント和歌祭御船歌・唐人披露(2021年4月14日)

造営や久能山から日光山への家康の霊柩を遷す小祥祭にも深く関わっていました。そのことから頼宣は紀州藩入国後すぐに天海を招いて和歌の浦の地に東照社と天曜寺の造営、および祭式と法会を整えました。創始された和歌祭は、紀州東照宮の例祭として1622年(元和8)の東照社(宮)創建の翌年からはじまります。その際、東照大権現の神輿をはじめとする渡物だけでなく、全国の東照宮祭礼では初となる和歌山城下町民による練物も登場しました。

本展では、2022年の四百年式年大祭にむけて、渡物と練物を紹介しました。とくに2021年の和歌祭で新たに復興される予定の渡物の棒振り・獅子・童子の装束のほか、2017年に復興した練物の唐人の追加装束3着も展示いたしました。

また、オープニングイベントとして2021年4月14日(水)の12時30分から13時10分まで、和歌祭で唐船・御船歌(2010年に当研究所も参画して復興)を担当している唐船御船歌連中と本学留学生による和歌祭御船歌・唐人披露を実施しました。このイベントでは2019年度、2020年度に新調された唐人装束3着や剣などの道具類もお披露目されました。(主担当:吉村旭輝)



2021年度
企画展

吉田初三郎式鳥瞰図から可視化する和歌山観光名所

日 程 / 2021年10月8日[金]~10月29日[金]

開館時間 / 10:30~16:00(閉室日:土、日、祝日および図書館閉館日)

入 場 / 無 料

会 場 / 和歌山大学 紀州経済史文化史研究所展示室
(和歌山大学図書館3F)

主 催 / 和歌山大学 紀伊半島価値共創基幹
紀州経済史文化史研究所

共 催 / 大学共同利用機関法人
人間文化研究機構
国際日本文化研究センター

※コロナ感染症の状況により、開館予定を変更する場合があります。その場合、ホームページでお知らせします。また、展示開催が中止となった場合、および展示終了後には、和歌山大学公式YouTubeにて展示(ダイジェスト版)を2022年3月末日まで公開します。

1872年(明治5)に新橋・横浜間の蒸気機関車運行に始まった鉄道事業は、その後、東海道全線開通へ、昭和初期のローカル路線の営業開始へと時代を経て発達しました。それにより全国各地へと人々の移動が容易になり、大正から昭和にかけて観光ブームが生まれました。その時代、観光地の情報を提供し、人々の観光動機を高めてきたものに、絵図や絵はがきがありました。

吉田初三郎(1884-1955)は、自ら日本内外を訪れ、旅行パンフレットに鳥瞰図を取り入れた絵師です。初三郎は、各地の都市、電車などの交通網、観光名所を美しい色合わせでパノラマ風の「初三郎式鳥瞰図」に描き出しました。少年期には友禅図案師のもとで丁稚奉公し、青年期には京都三越の友禅図案部で働いています。初三郎の描いた美しい色合わせは、この経験を活かしたものとなっています。

本展では和歌山県の代表的な観光名所である和歌浦、高野山、紀南の地を取り上げました。初三郎式鳥瞰図や絵はがきを通して、名所を目で味わい、大正から昭和の観光ブームへと時間の旅も楽しんでいただけますと幸いです。



2021年7月7日(水)より、常設展「紀伊半島の文化遺産」(特集:小滝徳五郎と海草郡郷土史コレクション)を開催いたしました。大阪府での緊急事態宣言発出をうけて本学において学生の登学が原則禁止となったため、当初予定していた9月17日(金)までの会期を短縮し、8月11日(水)までとしました。9月17日(金)以降ダイジェスト版を公開しています(和歌山大学公式YouTubeチャンネル)。

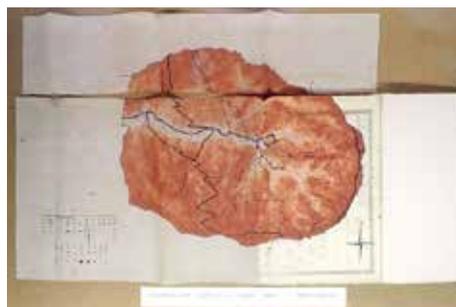
本研究所の常設展では、本研究所の収蔵品に加えて、和歌山高等商業学校・和歌山県師範学校から引き継いだ文化遺産を展示しております。紀伊半島の歴史や文化を紹介し、現在、そして未来へと文化財を継承していく本研究所の活動を広く普及させたく開催しております。

今回は「特集:小滝徳五郎と海草郡郷土史コレクション」として、本研究所で所蔵している「小滝徳五郎家文書」から郷土史コレクションを展示しました。

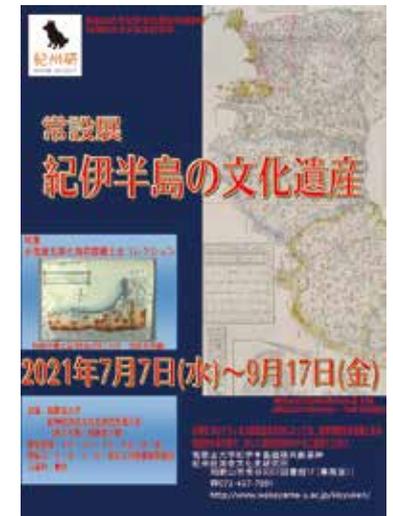
1909年(明治42)の郡役所の訓令によって、各村で郷土誌編集事業が行なわれました。1896年(明治29)に名草郡・海部郡の両郡が合併して成立した海草郡でも同様に『郷土史』が編さんされます。郡役所に提出された各村の『郷土史』は、海草郡誌編さん事務を囑託された小滝徳五郎の手に渡りました。本展では、小滝が海草郡誌編さん事務をととして手に入れた海草郡内各村の郡役所提出資料『郷土史』約40点を一同に公開しました。



常設展のようす



和歌山県海草郡 仁義郷土誌1910年(明治43)



依然収束の兆しが見えないコロナ禍において外出禁止や県外移動の制限等がつついており、地元でより身近な地域の歴史を知るきっかけを、本特集をとおしてもってもらえればと思い開催しました。短期間ではありましたが、多くの皆さんがご来場くださいました。

(主担当:吉村旭輝)



和歌浦名所 1925/紀州経済史文化史研究所所蔵



高野山名所図絵:参詣要覧(吉田初三郎) 1922/国際日本文化研究センター所蔵



田辺白浜温泉を中心とせる紀州の交通図絵(吉田初三郎) 1925/国際日本文化研究センター所蔵

執筆協力:石川肇(国際日本文化研究センタープロジェクト研究員/2021年度 和歌山大学国際観光光学研究センター客員フェロー)
参考文献:劉建輝・石川肇・古川綾子「吉田初三郎鳥瞰図へのいざない:想像×創造する帝国」2019/国際日本文化研究センター

(主担当:東悦子)

2021年度

特別展

1969:和歌山大学の全共闘運動

開催期間／2021年11月16日[火]～12月17日[金]

開催場所／紀州経済史文化史研究所展示室

テレビなどの映像を通して、東京大学の安田講堂に突入した機動隊とそれに抵抗する学生の攻防を見たことがある方も少なくないのではないのでしょうか。これは、「70年安保闘争」や「全共闘運動」などと呼ばれた日本



の学生運動の一齣です。和歌山大学においても、1969年に大学の建物のバリケード封鎖と授業ストライキが起きました。和大学生たちによるこれらの行動には、単に大学への要望のみならず、社会や政治に対する問いや主張が含まれていました。

今回の特別展は、当時からおよそ半世紀が経過した今、全学共闘会議(全共闘)を結成してバリケード封鎖と授業ストライキを実行した和大学生の足跡を追う試みです。経済学部で新たに発見された封鎖解除後の建物内を撮影した写真のほか、学生たちが作成したビラや教授会資料を含む大学史資料室所蔵の文書などを通して、全共闘運動の主張や彼らに対する社会のまなざしを浮かび上がらせます。これらに加えて、当時学生であった人々へのインタビューの内容も展示します。学生運動に関わった人々の声は、文書資料のみでは分からない全共闘運動のあり様を生き活きと写し出しています。この特別展のイメージとオーラリティを通して、全共闘運動が現代に投げ放つ問いを体感して頂ければ幸いです。

(主担当:西倉実季、長廣利崇)

編集後記

この度、通巻9号の編集を担当することとなり、通巻1号(2018年発行)から「きのみなと」を振り返りました。執筆者の顔ぶれは、紀州経済史文化史研究所の運営にあたる教員たちはもとより、4学部と学内センターに所属する多彩な研究分野の所員からなり、それぞれの研究に関わる内容が、その道の専門家ではない者にもわかりやすく、且つ興味深く紹介されていました。

ページを繰ってみますと、博物館相当施設としての使命である展示会は、主担当教員の研究領域の特色と相まって、さまざまなテーマで実施されていました。また、シンポジウム、バス&トレッキングツアー、わかやま文化財「匠」講座など、知の提供に資する新たな事業が展開されていました。「きのみなと」は、紀州研の取り組みを学内外に広く知っていただくとともに、1951年(昭和26)に設置された紀州研のこれからの歩みを記録していく点でも意義があるものと感じた幸いです。

近年、SDGsの観点などから紙面による出版がPDFに取って代わる傾向にあり、当研究所でも議論となりました。その中で、紙面を手にした読者層が一定数いることや学外の機関から配布したいとの要望もあるとの声があがり、通巻9号の発刊にいたりしました。

コロナ感染症拡大防止のために実施がかなわない事業が多い中、「きのみなと」を発刊できることの喜びを得、今号が、手に取ってくださった皆様の知的好奇心に触れるものとなっていることを願います。最後に、執筆にご協力いただいた皆様に感謝いたします。

東悦子



紀州研ホームページ

